〔問題〕

以下の文章を読んで、①著者の論旨を要約して論評し、その上で、著者の見解を参考にしつつ、②あなた自身が人に話を聞きにいくときに大切だと考える点を、作法やマナーなどと呼ばれるものも含めて、二点以上挙げてその理由を説明しなさい。挙げる点は問題文に言及されているものに限らない。また、③あなたが何か学術的な聞き取り調査に行くと想定して、どういう調査で、どういう人に、どんな質問を用意していくかを自由に書きなさい。なお、解答の記述にあたっては、上記三点の解答箇所がわかるように、文章の最初に、一、二、三、と数字を付すこと。

ひとの話をきく、というのはいいことだ。どんな人と話をしても、かならず勉強になる。人生や社会について視野をひろげてゆくためにも、たくさんの人の話をきくことがのぞましい。

しかし、ひとの話をきくということとはちがうのである。レコードやテープを機械にかけてその音声をきく、ということは、レコードやテープは、スイッチをいれさえすれば、ひとりでにスピーカーから音が流れてくる。しかし、生まない。たとえば、ここに、バングラデッシュの民話について知りたい、という人がいるとしよう。そして、さいわい、この問題について造詣の深い学者をたずねて対面する機会にめぐまれた、と仮定しよう。そんなとき、ただ黙ってすわっているだけではその学者がべらべらとしゃべってくれるものであろうか。黙ってすわっているだけでは、相手は、ただけげんそうな顔つきで見つめ、しばらく時が経つと、なんとなく不気味で不愉快な気分になってしまうにちがいない。

どうしたらよいのか。常識でわかることだが、ひとを訪ねたら、こちらから口をひらき問いを発しなければならぬ。問いがあって、はじめて答えが得られる。つまり、話をきくということは問うということなのである。問いがなければ、なにごとかさっぱりわからない。そして、問いと答えの連続によって会話というものが進行する。ひとをたずねて取材する能力は、べつなことばでいえば問う能力ということにほかならない。

それだけではない。問いかたのじょうずへたが取材の優劣をきめる。かつて、梅棹忠夫氏は問いと答えというものは、鐘と撞木のようなものだ、といわれたことがある。鐘の鳴りようは、どんなふうに撞木がそれを打つかによってきまる。腰のさだまらない、へたな人がよろよろと撞木を鐘にあてても、鐘は弱くコロンと鳴るだけであろう。しかししっかりした人物が、力をこめて打つべきところにぴったりと撞木を打ちつけるなら、鐘はこころよいひびきを朗々と鳴りわたらせるにちがいない。たしかに、そのたとえは正しい。取材する人の問いがへたなら、取材されるがわからかえってくる答えはなんとなくぼんやりしたものになるだろう。そしてそれと対照的に、問いがきちんと整理され、的を射たものであるなら、すばらしい答えがかえってくるであろう。取材されるがわが、いかに大学者、もの知り、わけ知りであろうとも、取材するがわの問う能力が貧困であるなら、せっかく面談しても、たいした収穫はないものなのだ。ひとの話をじょうずにきくためには、よき問いを発する能力が必要なのだ。ひとに会いにゆけばしぜんに話がきける——そんなかんがえかたをもつ人がいるとすれば、それは大きなまちがいなのである。

そして、いまの日本人、とりわけ若い学生たちに欠落している能力は、問う能力だ、とわたしは思う。日本の大学の教室などというのはその貧困が典型的にあらわれている場所であって、学生たちは、先生にむかっておよそ問うということをしない。たまに問う学生がいても、じょうずに問う人間はすくない。

（中略）

ほかのところで書いたことだが、外国の大学で教えていると、授業というものはことごとく問答の連鎖であることに気がつく。さいしょ一〇分間ほど話をすると、すぐに五、六人の学生から手があがる。その問いに答えていると、その答えに反応してつぎの質問が投げかけられる。そういう対話の流れが授業というものなのだ。知的訓練というものは、じょうずな問答の訓練のことなのである。それは、生ま身の人間どうしが対面したときにはじめて可能なことだ。教室の意味は、そこで問答が展開されるというところにある。問答のない教室

（7頁につづく）

には、なんの意味もない。

多くの人たちは、マンモス教室、マスプロ教育といったことばでこんにちの日本の大学を批判する。ビデオ・テープを使ったりして教育の機械化をすることについてもたいていの人が反対する。そしてその理由というのは、申しあわせたように「人間的接触の不在」ということだ。それはそのとおりだと思う。しかし、その「人間的接触」の場であるはずの教室で、まったく問答がないという事実をみると、たいへんに逆説的なことだが、マンモス教室だっていいではないか、といいたくなってしまう。

問う能力、というのは、この本のはじめのほうに書いたように、問題を発見することであり、あるいは問題意識をもつということである。問いがない、ということは、こんにちの若ものたちがおしなべて問題を見つけていないということであり、見つけようともしていない、ということでもある。こんにちの大学生をわたしは知的難民ということばで表現したが、かんがえればかんがえるほど、日本の教育の事態は深刻なのである。

だからこそ、わたしは、問う能力の再開発をこんにちの教育の最大の課題だとかんがえる。この能力の開発なしに、情報を使うことは不可能だし、とりわけ、ひとにじょうずに話をきくことなどできた相談ではないのだ。落語には「こんにゃく問答」というのがあって、まことにトンチンカンな「問答」が笑いをさそうが、たとえば禅の世界などでは、問答が精神を深める方法であったし、プラトン以来の弁証法というのも、人間的レベルでいうなら、じつは「問答」ということなのであった。取材の過程は、問答の過程と同義であり、その問答の能力は、ひとの話をきくという場面でもっともはっきりとためされるものなのである。

（中略）

いささか、へんな言い方かもしれぬが、とりわけ学生たちはこのへんでひとつの意識革命を必要としている、とわたしは思う。つまり、学生は先生を使う、ことをもっとかんがえるべきなのだ。先生たちはもの知りである。本もたくさん読んでいるし、経験もゆたかだ。要するに、先生たちは情報のタンクのような存在なのである。先生が教室で話すことは、そのタンクのなかに貯蔵されている情報のごく一部であるにすぎない。学生である、ということはそのタンクのなかから、自由に、そして貪欲に情報をひき出すことがゆるされている、ということだ。そして教室というのは、そんなふうに情報をひき出すための場面なのである。大学というところは知識の切り売りの場所でしかない、といったことをいう学生がいる。しかし、切り売りが気にいらないなら、もっとべつな買い方をしたらよろしかろう。そのためには、日本の教室の伝統を破って、堂々と臆せずに手をあげ、知りたいことを問うべきだ。たいていの先生は、それを歓迎するはずなのである。スーパー・マーケットのごとき切り売り現象が発生したのには、売り手がわの便宜もあろうが、買い手がわもそれを望んできたからである。学生たちが、よき問いを発することができるようになれば、教室の風景はがらりとかわってゆくだろうし、同時に、そこでこそはじめて「人間的接触」というものの意味がはっきりしてゆくにちがいないのである。

べつな言い方をすれば、大学にかぎらず、おおよそ学校というものは、学生・生徒にとっての取材施設なのである。じぶんの学びたいことを自由にひき出すことのできる場なのである。図書館を使い、先生たちのもっている情報蓄積を使う——学校はそのためにある。先生のいうことを、一字一句もらさずにノートにとり、そのとおり暗記するというのは、結局は情報に使われている、ということだ。はじめにのべたように、われわれはいま、情報に使われる立場から、情報を使う立場に、あるいは情報を受け身でうけとめ、それによって操作される立場から、主体的に情報をえらび、それを自律的な自我形成に役立てる立場へ、という転換をめざしている。とするなら、その第一歩は、問うこと、しかもじょうずに問うことでなければなるまい。

知的探求は、くどいようだが、問うことが出発点なのだ。問うことがあればこそ、図書館にもゆく。本も買う。索引もひく。そして、ひとの話をきくことのたのしみも、問いあればこその経験なのである。問いがはっきりしていないで、あるいはなにを問うべきかもわからないままにひとに会いに行っても、なんにもならない。ひとの話をきくまえに、はっきりさせておかなければならないのは、じぶんにとってなにが問題であるのか、についての自己確認である。その自己確認から問うべきこともしっかりしたかたちをとるようになるだろうし、そのしっかりした問いが投げかけられることによって、取材の対象である鍾は朗々たる音色でこたえてくれるにちがいないのである。人間相手の取材とは、問答のことだ。問答のない取材というのは、ありえない。耳学問の成果がどんなものでありうるかは、ひとえに問答の能力によるのである。

（出典）加藤秀俊『取材学』（中央公論新社、一九七五年）